『J（&海外）リーグ』を支える!!
大学サッカーの人材
“輩出力”

“大学”のススメ
A Special Story #3

文◎
安藤隆人
［フットボールジャーナリスト］

写真◎
BBM、J.LEAGUE

日本をけん引する大学出身の第一人者

4度のワールドカップ出場。インテル［イタリア］など世界で活躍し、
日本人最多5度目のW杯出場をうかがう，大学出身選手の第一人者だ。

根っからの努力家で
根っからの負けず嫌い

イタリア、トルコ、フランスと渡り歩き、2021年9月にFC東京へ復帰を果たした

#5

長友佑都

NAGATOMO Yuto
DF

明治大出身
2005～07年在籍

FC東京

東福岡高時代の印象は「とにかく頑張る選手」。練習で誰よりも声を出し、紅白戦では無尽蔵のスタミナで動き回る――。

長友佑都の大学時代を語るには、まず高校時代を知る必要があるだろう。東福岡高は長友入学の4年前に選手権を2連覇するなど、『赤い彗星』と呼ばれ、全国を席巻した。それゆえに多くの中学生が同校を志すようになり、必然的にレベルも上がった。中学進学時に愛媛FCジュニアユースのセレクションに不合格となり、愛媛県の公立中学を経て一般受験で福岡に渡った長友は、入学当時はほぼ無名の存在。推薦組の並み居る猛者たちの陰に隠れ、「トップ下をやりたい」と希望するも1年生チームでも出場機会は限られていた。

しかし、小さなころからコツコツと磨き続けたキック、運動量、スピードが森重潤也監督（当時）の目に留まる。「ボランチなら試合に出られる可能性がある」と告げられたことで、徹底して武器を磨いたという。レギュラーへの道は険しかったが、2年生の1月に新チームが立ち上がると、東福岡伝統の4－3－3のアンカーに抜擢される。2月の九州新人大会では豊富な運動量と粘り強い守備を披露し、のちのJリーガーをずらりとそろえた国見高に対し、圧巻のミドルシュートを決めてみせた姿は今でも印象に残っている。

高校最後の選手権にもレギュラーとして出場。明治大への進学は、まさに努力の賜物だった。

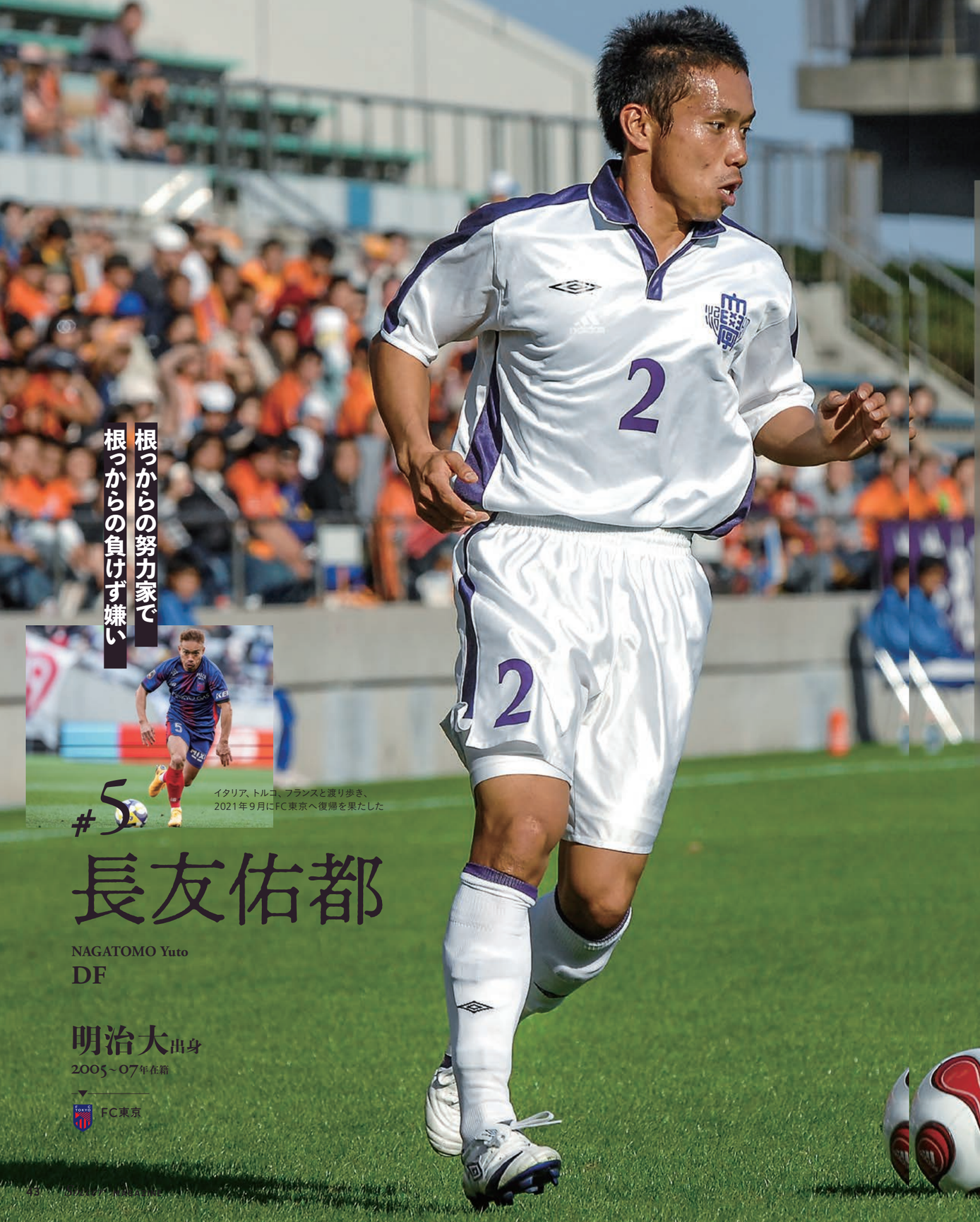
長友が明治大サッカー部の門をたたいた2005年は、関東2部から1部に6年ぶりに復帰を果たしたシーズン。すると神川明彦監督（当時）に武器であるキック、運動量、スピードをここでも評価され、早々に左SBへとコンバートされる。椎間板ヘルニアを発症した影響で、1年時は試合に絡めなかったが、この期間に再発予防として体幹トレーニングを取り入れ、ボールを蹴ることができなくても不断の努力を続けた。一方で、チームを支える応援団として、スタンドでも躍動。すでに有名な話となっているが、太鼓係として全力でバチを振る姿は、この時期のものだ。

2年生の夏に復帰すると、関東1部の後期開幕から左SBのスタメンに抜擢。これまでの思いをぶつけるかのように激しいアップダウンを繰り返した背番号12（当時）は、第15節の早稲田大戦でリーグ初ゴールをマークするなど、全11試合に先発出場し、10試合のフル出場で、3位躍進の立役者の1人となった。

3年生となった07年には背番号2を託され、開幕戦の順天堂大戦でゴールを決めると、前期は全試合フル出場し、2ゴールの大活躍。この飛躍的な成長が評価され、7月にはFC東京の特別指定選手としてプロデビューを果たしている。

その後、再びヘルニアと腰椎分離症を患うが、より本格的に体幹トレーニングを行なって、わずか2カ月で復帰を果たす。その後は北京五輪を目指すU－22日本代表入りなど、世代屈指の選手の仲間入りを果たし、3年生終了時点でのFC東京入りを決断。その後は日本代表入り、海外移籍と一気に階段を駆け上っていったことは、記憶に新しい。

根っからの努力家で、根っからの負けず嫌い。高校、大学時代の長友を振り返り、あらためて感じたのは、“サッカーがうまい選手”が大成するとは限らないということ。一番大切なのは、当たり前のように努力ができ、自分を信じ抜き、何事も全力で取り組むこと。いつも長友佑都の姿勢に学ばせてもらっている。



<< 明治大3年時の長友佑都。このシーズン限りでの退部、FC東京への加入を決断した

PROFILE ながとも・ゆうと
1986年9月12日生まれ。愛媛県出身。170cm68kg。DF。神奈SSS／[略歴]明治大→FC東京→チェゼナ（イタリア）→インテル（イタリア）→マヨルカ（スペイン）→マルセイユ（フランス）→トルコ→FC東京